
■ さろん | Mail News 2017/6/15 | #93 ■ 【読み物号】

ご案内不要の方はお手数ですがこのメールにそのままご返信ください。

哲学カフェ及び関連イベント情報をお送りします。みなさんの興味・関心の一助としていただくとともに、今後とも「さろん」を応援いただければ幸いです。

なお、このメールニュース掲載のコラム等は執筆者の個人的な考えを表したものです。会や専門領域における統一見解や事象を扱っているものではありません。予めご了承ください。

=====Vol.93 2017年6月15日(木)=====

さ | ろ | ん |
└ ┘ └ ┘

M | a | i | l | N | e | w | s |
└ ┘ └ ┘ └ ┘ └ ┘ └ ┘

<http://salon-public.com/>

(バックナンバーはHPからご覧いただけます)

<https://twitter.com/salontetsugaku>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
=====

★『さろん仙台ツアーいよいよ今週末開催』★

<ツアー概要>

・日程：6/17(土)から6/18(日)まで

・旅程：

1) 6/17(土) 午前～15時まで：仙台へ移動

2) 15:00～17:30 : さろん哲学 at カフェモーツァルト・アトリエ

3) 夕刻 : 親睦会

4) 宿泊 : 晩翠亭いこい荘

5) 夜 : 哲学枕投げリターンズ at 旅館の部屋

6) 6/18(日) 午前～15時まで：自由行動

7) 15:00～17:30 : てつがくカフェ@せんだい at smt

8) 18:00頃 : 現地解散

仙台ツアー実行委員長 堀越

INDEX

- | 【お知らせ】(6/21) ゆるゆるカフェ座談室「怒りや葛藤に直面したとき」
 - | 【1】誌上哲学カフェ「ミニさろん」第9回
 - | 【2】コラム/エッセイ
 - ◇『意見違いを乗り越えるには』
 - ◇『読後雑感；「哲学はじめの一步」』
 - | 【ご案内】「さろんラボ」企画を募集しています
 - | 【3】コトバをハーバリウムする
 - | 【4】さろんアーカイブの遊歩道
 - | 編集後記
-

CONTENTS

【お知らせ】

(6/21) ゆるゆるカフェ座談室
テーマ「怒りや葛藤に直面したとき」

通称『ゆるカフェ』。ゆるやかに営業中です。
今月のテーマは「怒りや葛藤に直面したとき」。
6月21日(水) 19:30-21:30 オープンです。

今月も例によって例のごとく少人数で集まって、ゆったり考えたり感じたり聞いたりしてみます。
ゆるっと奏でる月イチのセッション、お気軽にいらしてください。

定員5名まで

6月21日(水) 19:30より

渋谷駅徒歩6分(申込者にご案内)

参加費100円(別途、注文した飲食費実費をお支払いください)

お申込み: salontetsugaku@gmail.com

(幹事: せりざわ)

【1】誌上哲学カフェ

「ミニさろん」第9回

テーマ:『運命を信じる?』

午前中の仕事が立て込み、週に1度の限定15食スペシャルランチに間に合わなかった3人。
仕方がないのでいつもの定食を頼んだ3人だけど、もしも時間通りに職場を出ていたならばスペシャルランチを食べることができたのか、たとえ早く来られたとしてもやはり今日は食べられない日

だったのか。そんな他愛もない会話から、「運命を信じるか信じないか」という議論が始まり……。

テーマ：『運命を信じる？』

<あおやま>

わたしは信じますね。この世界、いや、宇宙の中の全ての物質は必ず自然の法則に従っているはずだわ。わたしは人間として日本に生まれ、現在ここに生きている。人間をミクロに見ていけば、構成しているのはタンパク質、それを構成するアミノ酸、さらに原子レベルでは炭素、酸素、水素、窒素に還元される。つまり人間は物質でできている。だから、わたしだって例外なく自然の法則、物理法則に支配されるし、今までもさらにはこれからの未来もこの物理法則の支配からは逃れることができない。この物理法則はわたしを支配し、未来を決めている。人はこれを運命と呼ぶのではないかしら。

<あかい>

僕は信じないね。確かに人間は物質でできている。でも僕の未来を決めるのは僕の行動であって、それは物質の支配下にあるわけじゃない。人間には心がある。物質で構成される僕の身体は心の容器に過ぎないんだ。もし僕と全く同じ物質構成のクローンがいたとしても、彼に僕と異なる心が宿っていれば全く異なる未来が待ち受けているだろうね。人類はこの世界に登場してから長い歴史の中で、様々な発明を繰り返し文明を発展させてきた。人の来し方行く末が運命によって決められているのなら、ここまで人類は栄えることは無かっただろう。運命に囚われないことで人間は己の限界に怯えることなく未来を眼差し続けることができるんだ。

<みどりかわ>

二人は、運命を信じる／信じないという立場で対立しているみたいだけど、それは、この世界の在り方や成り立ちに、僕たち人間がどれだけ関与しているのかという見解の違いにも置き換えられそうだね。ところで、この宇宙は不透明さで満ちているよね。物理法則は絶対的な力のように思えるけれど、その法則に未来が従っているとしても人は未来を 100%予測できているわけではない。じゃあ、僕らの行動や心は主体的にコントロールしていけるのかと言われると、周りに影響を受けないわけにはいかなくて、それも自信がない。そんな不透明な世界で不確かな人間が生きていかなきゃいけないんだから、時にそれはラクじゃないよね。そんなときは運命を信じて運命に身を任せたくもなるよ。一方で、ある種の世界の不透明さを明らかで確かなものに変えていけそうなエネルギーが湧いてくるときもある。運命なんてものは存在していなくて、どんな困難にだって打ち勝っていける、そんな気持ちになるときがね。つまり、運命を信じるか信じないかは、僕たちの世界に対する態度によって行ったり来たりするものなんじゃないかな。僕はそう思うんだ。

【2】コラム／エッセイ

- ▽【意見違いを乗り越えるには】 一生
▽【読後雑感；「哲学はじめの一步」】 セリンジャー
-

▽【意見違いを乗り越えるには】 一生

哲学ナビゲーター原田まりる氏は、著書の中でこのように語る*1。「ヒルティは『信憑性がある』と、『信用したい』は実は別物であると唱えている。ヒルティが言うには、我々は目的の有無に関係なく、普段から嘘をつくことに慣れているので、他人がつく嘘にも気づきやすいにもかかわらず、『本当か嘘か』ではなく『信じたいか信じたくないか』によって判断する場合があるというのだ。『信じたい』と願う気持ちは、時に我々の意識において『情報操作』を行う場合があるのだ。たとえ疑わしい部分があったとしても、『信じたい』と強く願うことによって『信じられるもの』だと自分を信じ込ませることが可能なのである。つまり、真実がどうであるかではなく、自分が信じるか、信じないかを判断している場合もあるということだ。

量子力学の世界的権威として知られる物理学者のデヴィッド・ボーム氏は、述べる*2。「人はこんな疑問を持つことがある。『こんなにはっきりしたことが、なぜあの人たちにはわからないのだろうか？ すぐ目の前の危険なのに、それが見えないなんて』。彼らにそれがわからないのは、思考プロセスに原因がある。思考プロセスの働きは、集団の場合も個人の場合と同じだ。思考や幻想、集団的な空想といったものは侵入認識である。神話とは集団的な空想だが、あらゆる文化には独自の神話が存在している。その多くは、あたかも現実であるかのように感じられた侵入認識なのだ。認識は人によっていくらか異なるため、人は実際には事実を見ていない。それこそが事実の正体だ。すなわち、人は事実を見ないものなのである。人がありのまま見ているわけではない事実、高次元の事実というものが存在する。そうした事実の把握から、我々は始める必要があるのだ。

哲学ナビゲーターは、「真実がどうであるかではなく、自分が信じるか、信じないかを判断している場合」があると指摘する。一方で、物理学者は、「人がありのまま見ているわけではない事実、高次元の事実というものが存在する。そうした事実の把握から、我々は始める必要がある」と主張する。歴史認識において日本が中国や韓国と対立し合う現況を直視するとき、二つの言明は、今後どうしたら良いか示唆を与えてくれているのではないかと。「この場はディベートではないので、他者と自分の意見とが違うときは、論争して勝ち負けに拘るようなことをせずに、むしろ『なぜ相手とは意見が違うのか』『その違いの根本はどこにあるか』を考え、対話をするようにお願いします」。弊会哲学対話の冒頭で、ときに参加者に説明する注意事項の一つである。誰もがこういう態度で意見の違いを乗り越える対話ができるようになる日を願って、今月も対話を続けたい。

*1：原田まりる著：「私の体を鞭打つ言葉」

*2：デヴィッド・ボーム著：「ダイアローグ」

最近とみに面白く読んだ初学者向け哲学カフェ関連本があったので紹介したい。——だがその前に。

哲学の専門書ではなく、哲学カフェ（哲学対話）っぽい本（しかも初学者向けの）がまるでひとつのジャンルを形成しているかのように増えてきたのは、比較的最近のことだ。この手の本の存在を強烈にアピールした池田晶子『14歳からの哲学』（トランスビュー）が2003年の出版。この本の反響は大きく、いま現在でも哲学カフェで取り上げられるし、毎月一章ずつ何周も繰り返し読み続けている読書会があったりするほど(*1)。過去のさろんのコラムでも聖理や一生が言及している。池田晶子が「生きているということは素晴らしいと思っている人にとって、生きているということは素晴らしい。なぜって、その人が、生きているということは素晴らしいと思っているのだから。／生きているということはつまらないと思っている人にとって、生きているということはつまらない。なぜって、その人が、生きているということはつまらないと思っているのだから。」と書き起こしたとき、それまでの哲学書とはあきらかに異なる眼差しが注がれているという、未知の感触が感じられた。

永井均『翔太と猫のインサイトの夏休み』（ナカニシヤ出版、1995）、『子どものための哲学対話』（講談社、1997）、『倫理とは何か』（産業図書、2003）という青少年向けの一連の著作は、それぞれ〈インサイト〉、〈ペネトレ〉、〈アインジヒト〉という名の猫が主人公と対話を進めていく形式において緩やかに結びついている。三作とも幅広い読者を想定して書かれているので専門用語は限定的かつごく僅かな使用になっているが、考察されている内容は決して初学者レベルに留まらない。三作の中で最も対象年齢が低い『子どものための哲学対話』の中にこんな文章がある。「ある感情がわきおこってきた原因をよく理解すると、その感情がうすれたり、消えたりすることがあるんだよ。つまり、頭でよくよくわかっていないから、いつまでも心でもやもや感じちゃうんだよ。」——この部分だけを切り出して（つまり文脈を無視して）警句や箴言のように理解することもできるが、全体の文脈の中でこの一節を理解しようとする読者は、平易な言葉で描かれた“永井哲学の思考”とでもいうものに直面することになる。しかし、日常的な言葉遣いが選択されていることによってかえってその専門性・高度な抽象性・特殊性が理解しづらくなるという弊害が本書では生じている。この弊害は、表題にある「子ども」だけに集中して書かれているのではなく、専門領域を等しくするような「大人」の存在が相当程度意識されていることに起因する。このことは次の例からも明らかである。近年の『哲おじさんと学くん』（日経プレミアシリーズ新書、2014）においても踏襲されているが、初学者向けの永井本には共通して、「卓越した先達が無垢な若者に新しい世界観を示唆する」様の啓蒙的な叙述、つまり構造としての上下関係がそもその枠組みとして採用されている。

対して池田本は、じぶん自身の中にいる14歳の“わたし”に語りかけるような対等性に則った構成になっており、簡明平易な文体でしか言い表しようのない思考を記述するためにこの語り口が必然的に選択されていると見ることができる。「あとがき」の「哲学」という何か、自ら考えるより先に存在しているわけではないのですが、哲学史や学説を覚えることが哲学であるという誤解は根深く、あるいはそれらを「やさしく」解説したところで、やはり自ら考えられているわけではなく、さらには自ら考えているかのようで、単なる個人の人生観であったり、そんなこんなを見る

に見かねて、とにかく人が素手で考え始めるその生(なま)の始まりを伝えるべく」にも明らかだが、14歳の平易な言葉使いでしか紡げない特有の思考を見事に掬い上げている点で、『14歳からの哲学』はYA(ヤングアダルト)読者が(そして大人も)哲学に触れる際の見事な導きになっているだろう。こうした池田の対等性の作法に支えられた眼差しと文章が掘り起こした読者は、この手の本としては異例ともいえるほど広く人口に膾炙した点に留まらず、没後十年のいまなお参照され続けていることから明らかほど層が厚い。良き読者に支持されながら、本書はいまやこのジャンルにおける準古典としての一冊になりつつある。

最近出版されたその他YA向け哲学カフェ関連本として、小川仁志『哲学カフェ! 17のテーマで人間と社会を考える』(祥伝社黄金文庫、2011)、苫野一徳による『子どもの頃から哲学者__世界一おもしろい、哲学を使った「絶望からの脱出」!』(大和書房、2016)や『はじめての哲学的思考』(ちくまプリマー新書、2017)、戸谷洋志『Jポップで考える哲学__自分を問い直すための15曲』(講談社文庫、2016)、原田まりる『ニーチェが京都にやってきて17歳の私に哲学のこと教えてくれた。』(ダイヤモンド社、2016)などがあり、話題を呼んだのは記憶に新しい。また、中島義道『哲学塾の風景__哲学書を読み解く』(講談社学術文庫、2017)は2012年出版の『哲学塾授業__難解書物の読み解き方』(講談社)を改題・文庫化したものだが、中島による教室(「哲学塾カント」)も一つの対話の場であることを再検証するかのように静かに改変された新しいタイトルや「読みながら考え、考えつつ読む、〈哲学の風景〉」という惹句を眺めていると、この5年間に哲学カフェや対話の場のプレゼンスが着実に増していることを実感する。

これまで挙げたのは一人の著者によって書かれた単著だが、哲学対話の隆盛・浸透に連れて共編著やアンソロジー形式の本も増えてきた。毎日小学生新聞紙上での連載「てつがくカフェ」が一冊になった『子どもの哲学__考えることをはじめた君へ』(河野哲也、土屋陽介、村瀬智之、神戸和佳子、毎日新聞出版、2015)は、メールニュースで不定期連載している「ミニさろん・誌上哲学カフェ」のネタ本である。また、直江清隆(編)『高校倫理の古典でまなぶ__哲学トレーニング』(岩波書店、2016)シリーズやデイヴィッド・A・ホワイト『教えて! 哲学者たち__子どもとつくる哲学の教室』(大月書店、2016)などは学校での利用シーンを念頭においてかなり実践的に編まれているといえる。これに対して、野矢茂樹(編)『子どもの難問』(中央公論新社、2013)は現役の著名哲学者たちが、一テーマにつき二名、それぞれの見解を披露して競演させるようなスリングな構成になっている。この本の中で野矢は、「哲学の問いは、「前に進め」という声から自由な者だけに許されている。だから、子どもにしか哲学はできない。／しかし、同時に、子どもには哲学はできない。「なぜ働くのだろうか」と問い続けているだけでは哲学とは言えない。そもそも、たんに「なぜ働くのだろうか」と口にするだけでは、まだ問いにさえ到達していない。それはたぶん、何かため息のようなものにすぎない。／哲学の問いは、明確な答えをもつような問いではないばかりか、問いの意味さえ、定かではない。問いの答えが何であるかと、そもそも自分が問うている問いの意味は何かを、同時に手探りしていかなければならない。哲学の問いを問うにも、独特の技術と力を必要とする。それは子どもにはまだ難しいに違いない。」と述べ、哲学をする者を「子どもにしか哲学はできない。しかし、子どもには哲学はできない。この逆説の中に、哲学者たちはいる。彼らは、大人でもない、子どもでもない。／哲学者なのだ。」と措定する。換言すれば、哲学者であるためにはそれに応じたものが必要なのだという。初学者が初学者なりに哲学カフェ関連本及び硬軟の哲学書を紐解こうとするのは、この技術と力を身に付けそれによって自身の人生を切り拓く、一個の哲学者たらんと欲するからだろうか――。

さて。

本題の最近読んで面白かった入門書とは、これもアンソロジー形式の本となる『哲学はじめの一步』（立正大学文学部哲学科編、春風社、2017）である。本書には〈働く〉と〈楽しむ〉の二冊がある。両書を通覧するとこの二つのテーマが適当に選ばれたのではなく、表裏を成して設定されていることに気づく構成になっていて、二冊を往還しながら読むことでより多くの探求ポイントがまなべるようになってきている。筆者が最も興味深く読んだのは、各執筆者による記述のバラエティの豊かさである。〈働く〉という統一テーマとは別に執筆者ごとにサブテーマが設定されているのだが、その間についての語り口は、〈叔父と姪の対話篇〉風、〈オーソドクスな哲学エッセイ〉風、〈社会的モノグラフ〉風、〈ネット掲示板に擬態したもの〉（特にこれが興味深かった）など実に多彩だ。執筆者の個性が反映された結果であろうが、同時にこれは「“哲学的思考”がどんな文体や記述形式によって定着されたか」についての見本帖でもある。本書を通覧することで、読者は哲学的思考を記述するための多彩な手がかりにも触れることができる。野矢本で指摘された、哲学の問いを問うための「独特の技術と力」を記述面からまなぶ際にはきわめて有益な一冊となるのでは、と考える。

なお紙幅の都合により取り上げた本はごく一部であり、これ以外にも多くの関連書が出版されている。いずれ機会をあらためて紹介しきれなかった本もフォローしたいが、読者諸賢のお薦め本があればぜひお知らせいただければ幸甚である。

（※文中敬称略）

*1) : a 《『14歳からの哲学』を読む／読書と対話の会@富士見台》

<https://msentalife.wixsite.com/entalife/blank-6>

別に下記の集いもあり。

b 《人生カフェ：『14歳からの哲学』を読む（第2回目）》

<http://cafephilo.jp/events/event/cafephilo-574/>

【ご案内】

「さろんラボ」ではみなさんのやる気とアイデアを募集しています♪

名称：【さろんラボ】

コーディネーター：【大村】

「さろんラボ」、常設しています。

このさろんラボではみなさんの「やってみたい」を核に、「さろん」を触媒にして、どんな化学変化が起きるかを試みる場所です。さろんラボは当面継続して設けていきます。

この「さろんラボ」からは、さろんの参加者の手で、以下のイベントが誕生しました。

【さろんラボ 001】 「あたまの中を散歩するてつがくカフェ」

<http://sanpo-tetsugaku.jimdo.com/>

【さろんラボ 002】 「哲学カフェ Ante-table/アンティテーブル」

<http://ante-table.wix.com/ante-table/>

既存の哲学カフェのカタチに限定せず、みなさんの中で温まっている関心ごとやご興味を添えて、どうぞお気軽に下記までご連絡下さい。みなさんとの新しい化学変化を、スタッフ一同心から楽しみにしています。

▽詳細はこちらまで

salontetsugaku@gmail.com (担当：大村)

【3】

コトバをハーバリウムする #20 (クスノキ)

本のコトバから

女との時間にはいつも色があった。女そのものがその時々によって様々に色づいた。オレンジ色のこともあれば青色のこともあった。黄色くふて腐れもした。次の日にはいきいきとした真っ赤な体で私に飛びついてきた。髪は銀色に渦巻いていた。女が帰ったあとで、部屋中に散らかったたくさんの色を片づけるのが大変だった。シーツに染み込んだ灰色はなかなか落ちなかった。

——田中慎弥『色』（『田中慎弥の掌劇場』集英社文庫所収）

歌のコトバから

ひとつにならなくていいよ
価値観も理念も宗教もさ
ひとつにならなくていいよ
認め合うことができるから
それで素晴らしい

——Mr.Children『掌』（作詞：桜井和寿）

さろんアーカイブの遊歩道 #14 (た)

カテゴリ：【さろん哲学 議事録】第8回、第12回

【さろん工房 過去のイベント】

テーマ：「ものの見方がかわる」「面白い、について考える」

「コトバッチ」「面白い自己紹介をつくる」

開催日：ものの見方がかわる 2011年4月7日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_08.pdf

コトバッチ 2012年2月5日

<http://salon-public.com/koubou/sakuhin/koubou02.pdf>

面白い、について考える 2011年8月13日

http://salon-public.com/wp-content/uploads/2013/01/salon_giji_12.pdf

面白い自己紹介をつくる 2011年10月30日

<http://salon-public.com/koubou/sakuhin/koubou01.pdf>

さろん哲学は次回で82回目を迎えます。朝さろんは先日の日曜日に69回を数えることができました。現在は準備中ですがワークショップ形式のさろん工房も開催してきました。それだけの数、それぞれの方法で思考と対話を重ねてきたわけですが、ひとつひとつが一回性の独立したイベントというわけではなく、同じテーマを別の角度からとらえなおしてみようと試みたこともありました。それが、さろん哲学の第8回「ものの見方がかわる」、第12回「面白い、について考える」から発展したさろん工房の「コトバッチ」と「面白い自己紹介をつくる」です。頭を使って考えていたテーマに、身体を動かしてアプローチしてみる。場所を変えてみる。一緒にいる人を変えてみる。そんなふうに「考え、感じ、対話する」ことをいろんな味で味わえる場を、これからも創造していきたいなあと思っています。

編集後記

メールニュース第93号をお届けします。

こんにちはフクロウです。ほう。

毎週木曜に放送してる「秘密のケンミンSHOW」が好きで録画予約してんでいます。晩ご飯どきにビールをお供に眺めていると、ふしぎと乙な気分になります(お手軽!)。でもあの番組って「親の代から東京に住んでますけどなにか?」みたいな人にはピンとこないんじゃないか、と思ったりするんだけど実際のとこどうなのでしょう。

さいきん放送した「北埼玉はほぼ群馬だ」っていう回が個人的に神回でした。番組内で恒例になっている中山秀ちゃん（群馬）と土田つっちー（埼玉）の定番の掛け合いをませつかえすような現地レポートになってて会心の出来でした。（ビールも実に旨かった。）

この「神回」ってことば、はじめて知った時には「うまい！」と思わず膝を打ちました。言われてみると、毎週見てる番組でも「おもしろい時」と「つまらない時」があるな～、って。それで考えるのは、繰り返されるフォーマットであっても一度として同じものはない。毎回違ってるってこと。単調に見える毎日も、毎朝の通勤電車も、その日の空も、じぶん自身も。そしてもちろん、「さろん哲学」、「朝さろん」、「さろん工房」や、あらゆる哲学カフェも。

読者のみなさんの「さろんの神回」っていつでしたか？ 神回のお話し、ぜひ聞かせてください。

では、仙台にいきます～。

また次号でお会いしましょう。ほう。

編集：（フクロウ）

さろん | Mail News 2017/6/15

⇒次号（7月1日発行予定）

さろん Mail News 第93号 / 2017年6月15日発行【読み物号】

編集・発行：さろん

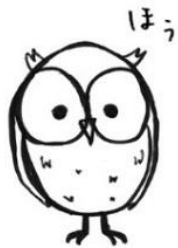
salontetsugaku@gmail.com

<http://salon-public.com/>

<https://twitter.com/salontetsugaku/>

<https://www.facebook.com/salontetsugaku/>

-
- ◇ 「さろん」にお知らせいただいたお名前・メールアドレスなどの個人情報は、当会からのご案内のためだけに使用いたします。
また、ご本人の同意なく第三者への提供はいたしません。
 - ◇ 「Mail News」の無断転載はご遠慮ください。転載ご希望の場合はご連絡願います。
バックナンバーはHPからご覧いただけます。
 - ◇ 【Twitter】 <https://twitter.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【Facebook】 <https://www.facebook.com/salontetsugaku/>
 - ◇ 【ホームページ】 <http://salon-public.com/>
 - 「さろん哲学」Web サイト <http://salon-public.com/tetsugaku/>
 - 「朝さろん」 Web サイト <http://salon-public.com/asa/>
 - 「さろん工房」Web サイト <http://salon-public.com/koubou/>



"copyright (c) 2011-2017 さろん. All rights reserved."
